

プロ野球団におけるスポーツボランティアの活用可能性

The possibility of utilizing sports volunteers for professional baseball teams

1K03B016-1 石井 大智

指導教員 主査 作野 誠一 助教授 副査 木村 和彦 教授

【緒言】

「Jリーグにはあって、なぜプロ野球にはないのだろうか？」この単純な疑問から、プロ野球団におけるスポーツボランティア活用の可能性について考えてみることにする。

近年の相次ぐ企業スポーツの廃部、オリックス・バファローズの合併問題など、親会社の経営に影響を受けやすい球団経営のあり方が取り沙汰されている。ビジネスとして成り立ちながらも、お金儲けをすることを求められていないという矛盾をはらむ球団経営において、球団存続のためには、いかにして経費を削減するかが、重要な要素のひとつとなる。そうしたときに、スポーツボランティアを管理し、活用することは、人件費削減の面で大きな役割を果たすこととなる。試合運営におけるチケットもぎりやごみ拾いなどをはじめ、ファンサービスイベントの補助、日常業務の補助に至るまで、さまざまな業務において活躍の場がある。

スポーツボランティアの活用に向けた検討課題としては、次の5つの項目が挙げられる。

- ①ホームグラウンドの経営
- ②ボランティアを採用する意義
- ③採用方法、採用人数
- ④ボランティアスタッフのモチベーション
- ⑤ボランティア組織の運営、管理

こうしたことを踏まえ、本研究ではプロ野球団におけるスポーツボランティアの活用可能性に関して実践的提言を行うことを目的とする。

【研究方法】

プロ野球のボランティアに関する先行研究は皆無と言ってよい。そのため、本研究は、筆者が実際にプロ野球団（読売巨人軍、横浜ベイスターズ）事務所へと赴いて社員の方々から伺ったインタビューをまとめ、それをもとに考察を行った。

わが国では、ボランティアへの関心が高まるとともに、スポーツボランティアへの関心も高まってきている。このため、スポーツボランティアに参加する側のニーズはあると考えられる。そうし

た時に問題となるのは、スポーツボランティアを採用し管理する球団、つまり受け入れ側のニーズがあるかどうかである。球団経営において、スポーツボランティアを活用することが可能であるのか、また、必要な存在であるのかをプロ野球球団職員へのインタビューを通して明らかにした。

【結果と考察】

インタビュー調査から以下のことが明らかになった。

- ・横浜ベイスターズは、現在採用する予定はない。可能であれば活用したい。しかし、現実的には難しいのではないかと。
- ・読売巨人軍では2軍において試験的な採用を予定している。それを踏まえて、1軍でも活用したい。

こうしたことから、プロ野球団においてスポーツボランティアを活用したいというニーズがあることが示された。その一方で、採用にあたって、以下のような障壁があることもまた、回答から得られた。

- ・70年というプロ野球の歴史と、意思決定までの手順の煩雑さが、新しい取り組みを導入しにくくしている。
- ・年間70試合弱のホームゲームの多さゆえ、人材を確保できるかどうか不安がある。
- ・ホーム球場との関係や経営形態により、プロ野球団の一存で採用を決めることができない。

【まとめ】

現代は多様なエンターテインメントが溢れている時代であり、競合他社も多く存在し、プロ野球界も変わらなければならないという強い気持ちがあることを感じた。スポーツボランティアも、機会があるならば、あるいは可能であるならば活用したいというニーズがあった。採用にあたる手間の煩雑さや、管理の難しさなど障壁は多いが、2軍からの試験的導入や、比較的に入材を集めやすいであろう夏休みの期間を利用しての導入などの活用へ向けての一步を踏み出して行く必要があると考える。